仲間の輪

手作りの寸劇を通して認知症理解へ
家族を応援したいと、笑顔で励む輪

スマイル劇団

「認知症の方を人間として理解してもらいたい」「認知症に関わる問題を身近なものとして、みんなで一緒に考えていきたい」という、手づくりの劇などで認知症理解のための普及啓蒙活動を展開している『スマイル劇団』の皆さん

年齢とともに出現頻度が高まる認知症。85才以上のお年寄りの4人に1人に発症が見られるという認知症は、高齢の父母をもつりらく世代にとって、家族の問題であり、そしてまた近い将来、自分たちにも起こりうることでもある。そんな認知症について正しく、わかりやすく、より多くの人に伝えたいと、劇という表現を基本の一つに活動しているのが『スマイル劇団』だ。

2月1日エルパーク仙台で開かれた講演会も、幕開けは寸劇「わすれな草～ともに歩む道～」だった。50年連れ添ったごく普通のご夫婦、茶の間での会話を中心にストーリーは展開していく。ちょっとしたもの忘れに始まり、やがて家事をしなくなっていく妻。帰省した娘とのやり取りから認知症が浮き彫りに。夫は家庭をかえりみることの少なかった半生を振り返り、認知症の妻と向き合い支えていこうとする。目の前でリアルに展開される初老の夫婦の物語は、けっして他人事ではない自分事であった。

寸劇に続く第二部は、認知症の早期診断や専門的な助言を行ういずみの杜診療所の山崎英樹医師による講演。「これからの認知症地域ケア」と題して、歴史や制度、原因疾病の変化も含めながら、「そばにいる人間としての心得」が会場を埋めた人々へと語られていく。認知症の原因疾病にはいろいろあるが、病名を知るのではなく症状を知ること、そして本人の苦労を知ることが第一義。認知症女性の手記を紹介しながら、結びには「〝その人に何ができるか〟ではなく、〝その人と何ができるか〟。その人とともにあるという水平発想が、認知症のケアには大切です」と話され、会場は共感と拍手に包まれた。

閉会後、会場の片付けをテキパキとこなすスマイル劇団の皆さん。15名のメンバーは、グループホームの施設長だったり、保健師、訪問看護師、そして家族の会の方々だったり、代表者の佐野ゆりさんも保健師だ。

「皆さんとても穏やかな人柄の人ばかりで、真剣に認知症について考え、活動に励んでいます。それぞれ忙しいながらも、小中学校を回って寸劇や紙芝居を上演したり、各種講座での普及啓蒙活動をしています」と話す。元々は平成21年の仙台市認知症対策推進会議に基本があって、1年だけで終わらせるのではなく、継続して活動しようと集まったメンバーが発足させたNPO法人。仕事の後や休日に集まって、劇を考えて練習、そして上演。活動も4年目で、作った寸劇は8本を数えるという。

これから増えていく認知症について、家族のつらさを知り、共に生きることの大切さを広く、あらゆる世代の人たちに伝えていくことを、皆さん一人一人が使命と考え、心のネットワークで励んでいる。

「"共感できること"を大切にした活動も円滑にすすみ、認知症の初期症状を拾いあげるDVD2本を制作するなど広がっています」と話す、代表の佐野ゆりさん

講演会の第二部は、永年、認知症の医療・介護に携わってきた、いずみの杜診療所の山崎英樹医師による講演。現代を生きる家族として知っておきたい認知症に関わる話が幅広く取り上げられ、また、心のあり方も淡々と話された

スマイル劇団事務局
仙台市宮城野区西宮城野10-21
社会福祉法人ゆうゆう舎内
FAX 022-293-0646
E-mail smail_sendai@yahoo.co.jp

笑いあり、涙あり、ごく普通のご夫婦が展開していく物語はとてもリアルで、認知症は、自分事であることを教えてもらえる。認知症であっても、幸せなひとときがあればいい、一日一日できることを共にして、家族にありがとうと言えればいいですね…そんな風に結ばれていく寸劇「わすれな草～ともに歩む道～」はスタッフ・キャストとも、もちろん全て『スマイル劇団』のメンバーだ